

更級への旅

60

「更級日記」作者生誕千年・その二

菅原孝標女はどのようなようにして更級に心引かれていったのでしょうか。天皇の命令で平安時代に編まれたわが国最初の勅撰和歌集「古今和歌集」が一つの大きな刺激でした。

更級日記というタイトルにつながった和歌「月も出でて闇に暮れたる姨捨に何とて今宵訪ね来つらむ」は、古今和歌集収載の次の歌を踏まえているというのが研究者の間では通説です。

わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て（私の心はどうにも慰めようがない。姨捨山に照る月を見ていては）

かきむしられる思い
なぜ、この歌が孝標女を触発したのかと言えば、闇夜を照らす月の光は太陽の光と違つて、哀しみを増幅させるからです。姨捨山に捨てられた老婆の心境を思うと、美しい月であっても、いえ、美しく妖しい光を発散させているからこそ、自分の心はどうに

も慰めようがないのです。

「慰めかねつ」の「つ」に、そのかきむしられるような思いが込められています。「行きかねる」と言えば、行きたいのだけれど、どうしても行けない事情があるという複雑な心境を感じるように、「かねつ」という表現によって、読者は月灯りの下での激しい感情の動きを感じることができま

す。孝標女が何歳で死去したか確定できる史料はないのですが、晩年、夫を亡くして精神的に孤独になっていたと考えられています。

孝標女が五十歳のとき、夫の橋俊通が信濃守として信

濃国（長野県）に赴任しました。守とは今で言えば県知事のような立場で、信濃国の行政や政治をつかさどる地方長官です。孝標女は同行せず、都に残っていたのですが、夫は一時帰京したとき、病氣にかかり死んでしまいました。

孝標女は少女時代から物語が大好きで、宮廷貴族の男性と女性の数々のラブロマンスを描いた「源氏物語」の世界にあこがれていました。自分もそんな恋がしたいと思つていたせいもあるのか、なかなか結婚しませんでした。三十三歳で結婚しました。晩婚となったのは、物語の世界へのあこがれも影響していたと見られます。

美しくも慰め難き更級の月

孝標女はそんなわが身を捨てられた老婆に仮託し、「更級日記」を書き上げたわけ

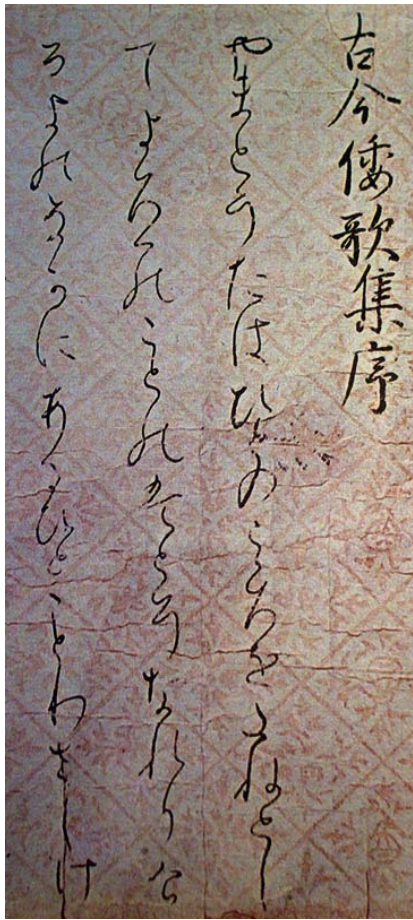
です。夫を偲ぶ思いもあつた？

ただ注意したいのは、だからといって孝標女が悲惨な孤独の状態であつたというわけではないということです。彼女にはきょうだいもいて、経

済的にはさほど困窮してはいたわけではないとされます。「浜松中納言物語」など平安時代に書かれたほかの古典も彼女が作者とされているものがありますので、彼女には作家的な資質があつた可能性があるので

作家というのは実際の自分とは違う別の自分を文章で記すことができる力を持つ人です。実際には孤独であつたとしても、文章表現を通じて、それを乗り越えることもできます。わが身を姨捨山に文章で仮託できたことで救済され、精神的には安定した可能性も考えられます。

「更級日記」研究の第一人者の一人である三角洋一さんはタイトルの由来について、「亡夫俊通が信濃守であつた経緯もあり、夫を偲ぶ思いもこめているのかもしれない」（古典の旅⑤更級日記）と推測しています。だとすれば、「信濃」といえば「更級の姨捨」という連想がそれだけ強く働いていたことにもなります。



かばて始なて源
書しと統し
呼種と的
な心け
とそなり
は葉と対
の言の歌に
「やまの言の歌に」と、日本人の感性を簡潔に言いつつ、平安時代の文書として知られる。平俊頼が書写した

発行 二〇〇七年十二月二日
編集 さらしな堂
（代表・大谷善邦）



〒三八九・〇八一三

長野県千曲市若宮一八四・六
（旧更級郡更級村）